

## 教員養成の目標及び目標達成のための教育計画

子ども学専攻は、本学子ども学部子ども学科における教員養成をさらに発展させるとともに、生活支援科学研究科の理念に基づいた高度な専門職業人を養成することを、教育研究の目的としている。幼児期から児童期にかけての子どもの発達理解のうえに、教育学を中心に心理、保育、福祉、環境等の隣接分野も含めた子ども学の学問体系を修めて研究を深めると同時に、学校現場におけるフィールドワーク等の実践を通して子どもの生活をトータルに理解し、個別的な支援を行うことができる高度な課題解決力、卓越した実践的指導力を有する教員の養成をめざす。

こうした子ども学専攻の理念と性格から、「子どもに関する科学的理解を基盤に、個々の子どもへの生活支援の視点をもって、教育上の指導のあり方を探求する高度な課題解決力と研究力、実践への応用力を備えた教員養成」を、本専攻における教員養成の理念とする。

子ども学専攻において養成したい教員像は、以上のような教員養成の理念のもとで、生涯学び続けるという強い意志をもち、現在そしてこれからの日本社会で喫緊に求められる能力を磨こうと努力する教員である。

そのために、本専攻では、1年次に必修科目である「子ども学特論」(前期2単位)「子ども学実践演習」(通年2単位)を履修する。「子ども学特論」では、幼児期から児童期への発達特性の理解のうえに、子どもと子どもの育ちに関する研究の視点や方法を修得する。「子ども学実践演習」は、学校現場でのフィールドワークや授業観察を含む形態の授業であり、授業研究等、実践の理論化、理論の実践への応用について考察する。

さらに1年前期から2年前期にかけて履修する選択科目では、教科の指導法研究に関連した科目以外に、「学校ソーシャルワーク特論」「子どもの臨床心理特別演習」「子どもの食育特論」「子育て支援特論」等の科目を履修することで、子どもの生活場面への支援、家庭や保護者と連携する能力を身につける。

また、生活支援科学研究科の共通科目(必修)として、1年前期に「生活支援学特論」を履修し、地域生活支援学、健康栄養学、臨床心理学、リハビリテーション学の各専攻に属する教員から、生活の様々な場面における支援のあり方と方法について学ぶ。

2年間の学修の集大成ともいえる修士論文では、子どもの育ちと教育・保育に関連した領域で、各学生が自ら選択したオリジナルなテーマに沿って課題探求、課題解決的学修を継続的に推進し、高度な研究スキルと実践への応用能力、プレゼンテーション能力を身につける。

以上に列挙した科目は、「子ども学特論」と「子ども学実践演習」を除いて、教員免許状の取得に必要な科目としての位置づけをされていないが、本専攻における教員養成の理念と特徴を具現化する内容を含んでおり、本専攻では教職をめざす学生にも履修を推奨する。

以上で述べたような理念と構想から、「子ども学、及び子ども学を構成する教育学等の専門分野に関する深い学識をもとに、子どもと保護者、子どもを取り巻く様々な人々と連携して、適切な支援と指導ができ、教育現場でリーダーシップを発揮しうる教員」を、子ども学専攻のめざす教員像とする。